



Title	大工として生きてきた脳卒中者の経験：退院後の生活への移行に関する現象学的研究
Author(s)	藤原, 瑞穂
Citation	臨床実践の現象学. 2026, 8(3), p. 32-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大工として生きてきた脳卒中者の経験 —退院後の生活への移行に関する現象学的研究

The lived experience of a stroke survivor who had lived his life as a carpenter:
A phenomenological study of the transition to everyday life
after hospital discharge

神戸学院大学 藤原瑞穂

I. 緒言

脳卒中は脳に不可逆的な変化をもたらす疾患であり、その影響は身体機能にとどまらず、人がそれまで当たり前のこととして営んできた生活にも及ぶことが知られている。このような人々の生活の再構築を支援するため、リハビリテーションが導入される。リハビリテーションは、健康上の問題を有する人々が、環境との相互作用のもとで生活機能を最適化し、障害を軽減することを目的とした一連の介入と定義されている (World Health Organization, 2025)。

脳卒中後の運動機能の回復は発症後早期に大きく進み、その後は適応や代償を含む学習過程によって展開していくことが示されている (Kwakkel et al., 2023)。そのため、入院早期からのリハビリテーションが推奨される。そこでは機能改善や日常生活活動の自立に加え、意味ある作業への参加やQOLの維持・向上も重視されている (岩崎他, 2024; 道願・谷村, 2025)。医療保険による脳血管疾患等リハビリテーション料では、発症等から180日が標準的算定日数として定められ (厚生労働省, 2026)、退院後に外来リハビリテーションを継続する場合もこの期間が一つの区切りとなっている。

一方、リハビリテーションはしばしば「リハビリ」と略され、「訓練」として理解されることが少なくない。多田は「生きることで精一杯なのです。それは自分のなかで生まれつつある新しい人への期待からです。元の体には戻らないが、毎日のリハビリ訓練でゆっくりと姿を現してくる何かを待つ心があります」と綴っている (多田・鶴見, 2003, p. 31)。当事者にとって「リハビリ」は、「訓練」であると同時にそれまでの生き方や作業との関係を問い直し、生活を再編していく時間として経験されうる。

脳卒中後の生活経験に関する研究では、脳卒中者は変化した身体との関係を模索しながら新たな生活や自己のあり方を見だし、身体、参加、自己のあいだで調整を重ねながら生活を営んでいることが示されている (Arntzen et al., 2015)。その過程は変容、喪失、不確実性、社会的孤立を伴う経験として報告されている (Salter et al., 2008)。職人として生きてきた脳卒中者に注目した結城 (2011) は、身体経験の変化を「解体から分節」「局所から全体」「個人から他者」という局面として記述し、作業や他者との関係のなかで再構成されていく過程を明らかにした。

このように、身体機能の回復という視点だけでは捉えきれない当事者の経験が明らかにされ、退院後の生活への移行についても、自己や生活のあり方の変化や地域生活への再統

合の過程が報告されている (Ellis-Hill et al., 2008 ; Wood et al., 2010) . 発症後 6 か月という時期は, 入院から在宅, 外来へと生活の場が移行し, 変化した身体とともに生活を組み立てていくことが改めて問われる時期である.

本研究の目的は, この生活への移行期に焦点を当て, 外来でのリハビリテーションを続けながら日々の生活を送っている一人の脳卒中者の経験を記述することである.

Ⅱ. 方法

当事者の経験の内側に視点をとり, 立ち現れてくる現象を記述するため, 本研究では, 現象学を手がかりとして分析を進めた.

1. 研究協力者

柳さん(仮名)は関西地方に住む一人暮らしの 60 代男性である. 二人の娘はそれぞれ家庭をもって近くに住んでいる. 柳さんは脳梗塞による右片麻痺を発症したのち, 2 か月間入院して理学療法, 作業療法および言語療法を受け, 自宅へ退院した. 柳さんは時々段差につまずくことはあるが, ゆっくり歩くことができたので「理学療法は卒業」し, 嚥下障害のための言語療法と「手がゆうこときけへん」ために作業療法を外来で継続していた. 私は, 柳さんが通院していた協力施設で作業療法士から柳さんを紹介していただいた. インタビューへの協力をお願いしたところ, 快く引き受けてくださった.

2. データ収集と分析

柳さんへのインタビューは, 退院後 1 か月頃から発症後 6 か月までの 3 か月間に計 5 回実施した. インタビュー期間は 2016 年 8 月から 10 月であった. 複数回のインタビューを行った理由は, 生活への移行経験を継続的に捉えたかったからである. インタビューは作業療法が終了した後の約 1 時間, 評価室として使用されている静かな個室で実施した. 発症したときのことからはじめ, 自宅での生活の様子を含め, 自由に語っていただいた. また, インタビュー期間中にあわせてフィールドワークを実施した. 作業療法室で過ごす柳さんの様子や作業療法士とのやり取りに加え, 場の観察を通して生じた私自身の疑問や気づきなどを記録し, 分析の手がかりとした. 私はその場を見学している外来者という立場をとり, 挨拶や相づちなど周囲に馴染むような最小限の関わりにとどめて参加した.

インタビューデータは逐語録に起こし(総 43 ページ)テキストとした. 柳さんの語りから「リハビリ」ということばが多く出現した 1 回目と 2 回目, 5 回目の語りを中心に分析することにした. データ分析は村上(2013, 2025)を参照した. 柳さんの脳卒中後の生活は身体機能の変化としてだけではなく, 日常生活のなかでどのように行為し, 世界へ関わっていくのかという経験として現れている. テキストを繰り返し読み, 語りに現れる特徴的なことばや言い回しを手がかりに, 柳さんの経験と志向性の変化を検討した.

分析を行う筆者は作業療法士として脳卒中のリハビリテーションに関わった経験がある. テキストを読み進めるなかで, 私から取り除くことのできない関心や態度によって場に引き込まれていた様子がインタビューのなかの語りに現れていることに気づいた. そのため, 聴き手である私のことばが柳さんの語りに影響している部分についても記述した.

分析結果の記述は、主としてインタビューを行った時系列に沿って構成した。記述にあたっては次の省略と記号を用いた。Y：柳さんの語り，F：著者の語り，『』語られた内語，[...] 語りの省略，（ ）：内容の補足，（笑）：笑い，語りの最後（ ）：インタビューの回とテキストの行数である。

データ分析を終えたのちに現象学にかかわる研究会などで発表して参加者から解釈に飛躍がないかなどのコメントを求め、指摘をもとに修正を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、大阪大学人間科学研究科・社会・人間系研究倫理委員会によって審査を受け、承認を経て実施した（承認番号 20160001, 2021045, 2025002）。研究協力者には、研究の目的と方法、プライバシーの保護、自由意志に基づく参加と辞退の権利などについて十分な説明を行い、口頭と書面で同意を得た。

Ⅲ. 結果

柳さんは、若い頃から仕事が張り合いで、脳卒中を発症するまで長年大工として働いてきた。大工の修行時代は休みがなく、みんなが休憩していても親方から「道具を研いどけ」と言われ、怒られるばかりで1日が長かったという。つらくて何度もやめようと思ったが、唯一の楽しみは仕事終わりに仲間と「いい酒」を飲みに行くことだった。3年間の修行の後、1年間の御礼奉公を経て大工になった。「大変だったがその時分がいったばん面白かった（5回目 48）」という。脳卒中発症前は、朝4時に起きて自分の弁当を作り、洗濯物を干して、6時頃に仕事に出かけていた。「それがいつの間にか、どないなったか狂うてしまった（5回目 55-56）」。

1. 「手」の違和感

はじめに柳さんが身体の異変に気づいたのは、「手」の違和感からであった。

Y：[...] たばこを吸いよって、（持っていた）たばこが知らん間にぼとんとつまねいた（落ちた）わけや。最初はな。それが、日に回数が増えてったから『ちょっとおかしいな〜』と思って。それでこう、金槌を持ってもなんか力が入らんようになって、『こらもう調子悪いわ』思うて。そないなってから、1週間ほどしてから他の病院に車で行ったわけやな。（そし）たらもう血圧は200を超えとって。[...] うん。じゃけえもうちょっと早いことみんな「病院行ってこいや」「の〜おかしいど」ゆうて言いよったんやけれど「こんなもん、どないもないやろうが」ゆうて。『どうも、金槌持っても力が入らへんのこうおかしいな〜』思うて、こらいよいよ、たばこ、こらやっぱり病院行っとらないかなと思うて、行っただけのこっちゃ。うん（1回目 3-18）。

「最初」「ちょっとおかしい」と柳さんが気づいたのは、「たばこが知らん間にぼとんとつまねく」「回数」が増えたことだった。「知らん間」に起こってしまう出来事は「金槌を持ってもなんか力が入らん」ようになり、「調子悪い」こととして捉えられていく。

長年大工として働いてきた柳さんにとって金槌を持つことは日常であり、柳さんの手は、ことばとしてまとまりをもつ前の「なんか」を感じ取っていった。

調子の悪さは「ちょっと」「なんか」「こらもう」と進行し、「みんな」からも指摘されるようになる。「みんな」によって捉えられた調子の悪さは「病院行ってこいや」「の～おかしいど」と柳さんに向かうが、「いよいよ病院行つとらないかん」と思ったのは、そのような「みんな」のことばではなく、「金槌を持つ手に力が入らない」ことを「おかしい」と思った「手」の違和感からだった。

柳さんは「こらいよいよ、たばこ」と語った後「こらやっぱり病院」と語り直している。柳さんは、これまで主治医からたばこをやめなければならないことを指摘されていたので、今回の調子の悪さを「たばこ」と関連づけようとした。しかし「たばこ」をやめる時間の猶予はなく、「こらやっぱり病院行つとらないかん」ほど深刻な状況であることを、「手」は感じ取った。

2. 何回動かしても変わらない「手」を動かし続ける矛盾

退院後1か月頃の外来の作業療法は手の動きを中心としたもので、手指のストレッチからはじまり、その後、机上で細かなものをつまんだり、箸で小さな四角いスポンジや大豆を移動する練習が続いた。「手が不自由」で「思うように動かない」と語る柳さんに、私は「手」がどのような感じが尋ねた。

Y: 伸びひん。しまいまで（最後まで）曲がらへん。へて（そして）もう、それから力も握力も全然あれへんわけや。それやけん、なんの一つ持とってまぼんと落ってまうわな。ほんま握力が全然あれへんさかいな。へでもうこっから先しびれたようになって、あの、関節は痛いし、この指の関節はな、こ～痛いんや。曲がったあと伸ばそう思うたらな。へた（そしたら）こう伸ばすのばっかりやったら今度は縮める（曲げる）のがまたあかんのやな。これなんぼりハビリしたって、すぐに元通りになってまうな。

F: 元通りというのは？

Y: 悪い方に元通り。うん。何回したってこれはもうようならんな。そやけん「リハビリをようせなあかん」言うたって、もうやりがいがないわ。したってひとつも変わらへんから。時間かけて暇なときにやって、ずっとしとるけど、変わりひとつもないからな。もうしたってせがない（笑）。もう絶望やな（笑）（1回目 44-53）。

柳さんの「手」は一瞬「リハビリ」による変化の兆しを見せるが、「すぐに」「悪い方に元通り」になる。柳さんは外来での「リハビリ」に加え、「時間かけて暇なときに、ずっと」自分で「リハビリ」を行っていた。「朝も3時頃から目あいてまうと、手が届く範囲のところはずっと動かしている（1回目 160-161）」。柳さんにとって「リハビリ」は「伸びひん」「曲がらへん」「しびれて」「痛い」「手」を動かすが、「何回したってひとつも変わらへん」ものとして経験されていく。「したってせがない」ことを「時間をかけて」ずっと動かしている矛盾が、笑いに挟まれた「絶望」として語られた。

Y: 困ったもんやな. うん. さあはじめリハビリも週に2回行きよったんやけど, で, 先生に聞いても, 「2回こんなんしてもひとつも変わらへんやんか」ゆうて. 「こんだけしても変わらへんのやったらな. もう1週間に1回にしますわ」ゆうて. 「ああそうですか〜」ゆうて言いよって. そんなこっちゃろ. そんなたよりない返事やったわ (笑). 何話してもな. だからまあ「先生変わろうか」思うけど, そんな, またぐあい悪いかな〜思うてな〜. しとったんだけども. うん (沈黙) (1回目 134-139).

「こんなんしてもひとつも変わらへん」という訴えに, 医療者は「ああそうですか〜」と短く応じるだけである. 「先生に聞」き, 「何話しても」「たよりない返事」が繰り返されていく. その頼りなさは「先生変わろうか」と思うほどだったが, それも「またぐあい悪い」ことで, 柳さんは「困って」しまう. このように柳さんが医療者のことばに「たよりなさ」を感じるのは, 別の場面で医療者の話によって「決心」した経験があるからだ.

Y: やっぱりな, 先生に言われたことはな. 聞きよった. やっぱり自分かわいいし, な, もうこんな時やなかったら決心はできひんわと. [...] えらいもんやな思うたな. 先生の力がなかったら, うん. そやなかったら止めてへんやろうな. もう話聞きよったらな『こら止めないかな (笑)』と思ったわな. 「血管が細くなって」もう話聞きよったらもう恐ろしゅう (笑) なってきたな (1回目 342-352).

1日2箱のたばこを吸っていた柳さんは, 「たばこなどは絶対止められん」と思っていた. しかし脳卒中を発症した際に別の「先生」からたばこの害についての「話」を聞き, 「えらいこっちゃな」と思い, やめる「決心」をする. それは「もう気が狂いそう」な経験だった. 「先生に言われたことはな. 聞きよった」. これが「先生」に向かう柳さんの態度である. 先の語りに見られたように, 柳さんは医療者に自らの状況を語り, 尋ねている. 医療者とのこうした「話」のやり取りをとおして柳さんは自らの状況を受け止め, 自分の行為を立ち上げようとしていた.

3. 「リハビリ」の拡張

「したってひとつも変わらへん」と語っていた「リハビリ」は, 日々の営みのなかに拡張されていく.

Y: (夜は娘の家に泊まり), 朝食べて, 昼は (自宅に帰って) 自分でしよるけどよ. はじめは弁当してもらいよったんやけども (笑). [...] もう, 気の毒でかわいそうで. 自分 (娘) も仕事早いこと行きようるんな. そやけもう「どないどできる (なんとかできる) ことするわ〜」ゆうて. もうそれ今までしよったんやからな. そら, 包丁するのは使いにくい. もう暇いるけどもリハビリじゃ思うて, 時間かけてもしよるんじゃけどな. 何もそな (いに) すること (は) 好きやけん, 苦になれへんのやけど. 洗濯なあ, あれしたってまあ時間はかかるわ. 片手不自由やったらな. それでも時間かけて

(笑) して、昼間は暇なもんやから、ちょっと 11 時くらいまで草引きしたり、剪定ちよっとしてみたりしとんじゃけど (1 回目 73-81)。

柳さんは、自宅で「片手不自由」ななか、時間をかけて「包丁」や「洗濯」を行っていた。このような柳さんの行為の背景には、「仕事早いこと行く」娘がさらに早く起きて柳さんのために「弁当」を作り、子育てや仕事の合間をぬって柳さんの送迎をしてくれていることを「気の毒でかわいそう」と思う父親としての思いがあった。そして「包丁」や「洗濯」などの家事は「今まで」やってきた習慣があり、「好きで苦にならない」ので、「片手不自由」でも「どないでできること」として括られていく。「昼間は暇だから」「片手不自由だけど」「ちょっと」してみる。柳さんは自宅で「どないでできること」を探し、「ちょっと」を「時間かけて」行うことを「リハビリじゃ思うて」と意味づけた。

Y: 家のことすることなんぼでもあるんやけど、大工も長いことしてつとるから、したろうと思うても手ゆうこときけへんから、何にもできんわ (笑)。うん。ああやんちゃなこっちな。もうそういうことな、全然できんなくてもうたからな。手だけでも元通りになるんやったらな、まだちいとくらい働こうと思うんやけど、それでも見込みないわ。自分でそない思うわ (1 回目 178-182)。

「大工」は「長いこと」しているから「したろうと思う」。この構造は先の「包丁」や「洗濯」と同じである。「今までしよった」「包丁」は「片手不自由」だが「時間かけて」行う「リハビリ」となるが、「大工」は「手ゆうこときけへんから、何にもできん」「全然できなくなった」として「リハビリ」として語られることはなかった。

2 回目のインタビューの日、柳さんの作業療法には「つげの木の剪定」というプログラムが加わっていた。柳さんがいつものように手指のストレッチを行っている間、作業療法の実習生が一足先に外の庭に出て両手ばさみでつげの木を刈り始めた。その様子を柳さんは窓越しに見ている。柳さんと作業療法士は、実習生のはさみを持つ手つきが悪いことや、時々サボっていることを話題にする。しばらくして柳さんは作業療法士に誘われて庭に出てきた。作業療法士がはさみを柳さんに手渡すと柳さんは少し笑い、はさみを受け取った。そして勢いよくつげの木を刈り始めた。はさみを入れる角度と刈り込む勢いは、先ほどの実習生のものとは全く異なっている。柳さんはあっという間につげの木をきれいな球体に刈り込んでいった。その間、作業療法士と学生は、柳さんには少し大げさに聞こえたかもしれないが、心からの賞賛を伝え、柳さんが刈り込んでいく様子を繰り返し声にして拾っていた。以下は、その直後、いつもの部屋に移ってからのインタビューである。柳さんの方から声がかかった。

Y: あの質問してくださいよ。

F: はい、ありがとうございます。さっきあの剪定をされていたんですけど、どんな感じでしたか？

Y: どんな感じゆうて、気持ちよう感じたかったけれど、はさみがさんこ（状態がよくないこと）やったな（笑）。あんなはさみでは1日仕事できひんわ。[…] あんなはさみはあかん。はさみのせいにしたらもうひとつあかんねんけどよ（2回目 2-13）。

柳さんにとって剪定は、「気持ちよさ」が潜在的に予期される作業として現れた。しかし「はさみ」は錆びて「さんこ」になっている。そのため、柳さんによって期待されていた感覚とは異なる感覚、つまり柳さんがいつも使うよく手入れされた「はさみ」とは異なる切れ味の悪さが向かってくる。このとき、「手」のしびれや力の入りにくさは語られていない。そして「あんなはさみでは1日仕事できひん」「はさみのせいにしたらもうひとつあかん」と、仕事として要請されていた責任と職人の誇りが照らし出されていく。

Y: ずっと手が不自由でもう力はいらへんやろ。[…] 今のところはな。春先でようなるのか、このままなのかわからんけど。そやけえ、先で絶対治るということを誰もゆうてくれへんさかいな、[…] 「それは絶対もう治らん、後遺症が残るで」とかな。はつきりゆうてくれたらいんやけど。「ああ、頑張って、そしたらはよ治るさかい」ゆうくらいなこっちゃ。[…] もうはつきりゆうてもうてもええけどな。うん。なあまえ、「自分でしよったらようなるさかい」ゆうて、ほんまか思うやんないけ。[…] 自分でいたいもうずっと見とるさかい、手やけん自分でできるやんか。そうリハビリ来るより時間何回、長い時間しとっても一緒やな。手、ちと（少し）動くようになったらもう30分したら元通りや（2回目 122-137）。

「春先でようなるのか、このままなのか」、「先で絶対治る」のか「絶対もう治らん、後遺症が残る」のか。この語りに現れる「もう」は異なる時間性と切迫性を孕んでいる。「絶対もう治らん」という断絶、「もうずっと見とるさかい」の持続、「もう30分したら元通りや」の反復、「もうはつきりゆうてもうてもええけどな」の限界である。「30分したら元通り」になってしまう身体は、繰り返し柳さんを「このまま」へと連れ戻す。そしてその先には、「絶対もう治らん、後遺症が残る」未来が輪郭を帯び始めている。未来は「誰もゆうてくれへん」ままに留め置かれ、柳さんはこの2つの間で揺れ動いている。インタビュー終了予定時間が迫ってきたとき、柳さんは再び、剪定の話を持ち出した。

Y: あの、はさみが納得がいけへん。このはさみで仕事を見せられへんと思うた。うん。思うようにならへん思うとる。はさみのせいにしたらいかんのやで。

F: ええ、ほんとうに錆だらけで、手入れに出さないといけないですね。

Y: 「あほとはさみは使いよおう」ゆうんやさかいな。

F: あのはさみは研ぐことはできるんですか？

Y: ああできる。（自分は）研ぐん専門や。[…] リハビリでしょうか？ああ、楽しみにしとこか。ハハハ（2回目 263-275）。

柳さんは、インタビュー中も考えておられたのだろう。「あのはさみが納得がいけへん」ということを。剪定の直後は「あんなはさみでは1日仕事できひんわ」と語っていた

が、「このはさみでは仕事を見せられへん」と語りが変わっている。「はさみのせいにしたらいかん」のだけれど、「思うようにならない」のはやっぱりはさみのせいで、「はさみ」が「さんこ」でなければ、自分の仕事を見せられるかもしれない。

このとき、私は「リハビリ」に絶望し、不自由で力が入らないと語っていた「手」から、仕事を「見せる」世界へと柳さんの志向が移り始めているように感じた。そして柳さんをさらに具体的な行為のなかに引きずり込みたい衝動にかられた。私は柳さんが大工の修行時代に親方に道具の手入れを任されていたことを思い出し、「あのはさみは研ぐことはできるんですか？」と踏み込んでしまう。すると柳さんは「ああできる。研ぐん専門や。[…] リハビリでしょうか？」「楽しみにしとこか」と語った。

3 回目のインタビューのとき、柳さんは自宅から自身が使っていた剪定用の両手ばさみを道具袋に入れて肩にかけ、颯爽とやってきた。担当作業療法士が「金属探知機大丈夫でしたか？」「警備の人に捕まらなかったですか？」と笑いながら語りかける。すると柳さんも笑い、いつものようにベッドに横になり、作業療法士のストレッチを受けていた。プログラムが終わると今度は自分のはさみで、つげの木をざくざく刈り込んでいった。

4. 道具を燃やす一希いと区切り

発症から6か月後の最後のインタビューである。外来リハビリテーションの期間が終わり、これで「打ち切り」となる。今後のことが話題になった。少し長いが引用する。

Y: これから何も考えたことないな〜もう。何にも悪いことなしに達者におれたらな。これまた一番と思うわ。[…] そな思いました。うん。もう今みたいなこんな状態やったらな、もう、子どもにも迷惑をかけて辛いこっちゃ。でもしゃあないもん。甘えとるけどな。これをまた頑張って返す時がきたらなと思うけど、まあ無理やろな。[…] まあ、これ以上迷惑かからんようにな。元気になれば一番や。うん。これ以上悪うなったらもうどうしようもない。もう死んだ方がましや。うん。そな思う。[…] 田んぼの草刈り、畑仕事、しよるんけどな。草刈りはちょっとやり過ぎたらこたえるわ。えらい。無理したらやっぱり後でこたえるな。うん。こらもうしゃあないな。[…] でも、ごそごそ畑仕事するのもまあ楽しみや。仕事しよったらそんなことできへんだことがまあゆっくりできたやろ。[…] もうそれと人と話してちょっと一杯いただくのが最高やわ。もう自分でまだな、もうちょっと動いてしようと思うことができるだけのこと思うたらましやな。うん。それもできんようになったらもう（2秒の沈黙）、できる間はな。まだ張り合いがあるけどな。うん。また頑張りますわ。うん。

F: 再発をしないように。

Y: そうそうそう。無茶なことをしよったらまたな。これ以上なる恐れが（笑）多々あるから（笑）、もう自分でな、用心せなんだらしゃあない。うん。わかっとなるやけどな。うん。はあ、もう1回まともに仕事ができたらもう最高なんやけどな。もうあきらめて、道具もだいぶほかしたわ。[…] 道具も木も、ようけ置いとったもんも、もう焼いてしもうた。いつまでもこんな、使えるのにもったいないのう思うて置いとった。『しゃあないわ、もう焼いてまえ〜』（笑）思うて。うん、「はい、今やったら持っていねよ（帰れよ）〜」ゆうて。みな焼いてもうてすっきりしたわ。

F: 惜しい気持ちは?

Y: あるで (笑). 『こんなに使わなもったいないんやけど』と思うた. でも, 『木, もう, こんな片手で持たれへん』ゆうてもう燃やしてもうた.

F: すっきりされたところもあるんですね.

Y: そうそう. また『置いとったらよかったの〜』思うてできるくらいになつたらなあ, ええけど. そない『ああ, しもうたの〜, 置いとったらよかったの〜』ゆうてゆうくらいになつたらええけど, ま.

F: そうですね. そのときはまた買ったらいいですね.

Y: おう, そない思うわ (5 回目 59-128) .

柳さんは, これからのことについて「達者でおれること」が「一番」と語った. そして, 続く語りに「もう」が繰り返されていく. 「これ以上悪くなったら […] もうどうしようもない」「もう […] 死んだ方がまし」と語りは切迫するが, 「もう」ということばは次第に前向きなことばに接続されていく. それは「死」とは対極の「もう […] 一番」「もう […] 楽しみ」「もう […] 最高」「もう […] できる」である. そして「できんようになったらもう」と言いかけたとき, 柳さんは続くことばを飲み込んだ. そして「できる間は […] まだ張り合いがある」と切り返した.

そして柳さんの語りに二つの「最高」が現れている. 一つは「人と話してちょっと一杯いただく」ことである. 変化した身体で日々の生活を気遣うなかで立ち現れた幸せが, 修行時代に仲間と「いい酒」を飲んだ経験と響き合う. 後者の「最高」は, 長年, 道具を気遣いながら大工として生きてきた柳さんの「もう一度まともに仕事できたら」という希いである. そして柳さんはこの希いにいったん区切りをつけ, 道具を燃やしてしまう.

「みな焼いてもうてすっきりした」. その「すっきり」には, しかし同時に「置いとったらよかったの〜」と惜しむ未来が織り込まれている. 「『置いとったらよかったの〜』ゆうくらいになつたらええけど, ま」と, 柳さんは, 再び, 続くことばを飲み込んだ. 未来を描こうとしながら現実に戻されようとする柳さんに, 私はこのまま一緒に未来の続きを見たいと思った. そして, 「そのときはまた買ったらいいですね」と「そのとき」のことを持ち出す. すると柳さんは, 「おう, そない思うわ」と応じた. 私と柳さんは「置いとったらよかったの〜」と言える未来のなかで, 一瞬戯れた.

5. 「すごい働き」をする

「何にもできん」と語っていた柳さんだったが, 最後の語리には「もうちょっと動いてしようと思うこと」が現れていく.

Y: でまあ, 孫は, リハビリをようしてくれた. 字書くやつも, こう点線打って書いてくれたりな. いろいろ絵 (笑) も「描きなさい」とかゆうてよ. 「おじいさんちょうどテレビ見てへんさかい, これ先しなさい」ゆうてぬかしてな〜. 「よっしゃ」ゆうてしたけど. 「ここが, がいよう (いい具合に) 書けてへん」とかどないかゆうて, まるぺけ入れやがって (笑), 「ここはだめです」ってなことをぬかしてな (笑). ああ, しんどおなって

もうけどな. あれ, (入院中の) リハビリのな, ここへついてって, してもらようの横で見たんよう覚えとる. うん. うまいことすって (5 回目 141-149) .

孫は, 作業療法士の口調をまね, 柳さんは笑いながらそれに応えていく. 「うまいことすって」と, 柳さんの「リハビリ」は孫のままごとのなかで続いていく.

Y: 孫が弾く, 使うゆうさかいな, 「おじいちゃん, がいよう片付けとってよ, 検査にくるでな」ゆうて, 「検査にきました」ゆうて (笑). ピアノもまあ, きれいに磨いたってな. ワックスかけて. 「なんやこれせんど (しばらく) 使こうてへんけどきれいやんけ」「当たりまえよ. 掃除して磨いたったんやが～」ゆうて. 「なんやきれいいわ～」ゆうて. (孫が) 横で弾きようるわ. うん.

F: お孫さんのためにいろいろとされておられるんですね.

Y: うん. 畑に行っただって, なあ, まあ, 子どもは2人ほどで三軒ぶんや思ってしようるんや. [...] もう作って人にやるのが好きやけん.

F: すごい働きですね.

Y: そやで (5 回目 171-182) .

「頑張って返す時ができたらなと思うけど, まあ無理やろな」と語りながらも, 柳さんは娘や孫のためにピアノを磨き, 畑仕事として野菜を作っていた. 「すごい働きですね」という他者の評価に柳さんは「そやで」と即答する. それは「何にもできん」と語っていた柳さんの, 自身の「働き」に対する評価である.

IV. 考察

1. 道具の連関に現れる職人としての身体

柳さんは, 仕事は「手ゆうこときけへんから, 何にもできん」と繰り返し語っていた. 一方で, 自宅では包丁を使って食事を作り, 洗濯を行い, それらを「リハビリだと思って」続けていた. 同じ「手」をめぐる経験でありながら, 「仕事」は何もできないが「家事」は「リハビリ」だと思う. この一見矛盾する経験について考察する.

ハイデガーによれば, 人は道具を介した実践の連関のなかで世界に関わっている. 道具は単独で存在するのではなく, ある目的や他の道具, 人との関係のなかで意味を持つ (ハイデガー, 1927/2013) . こうした実践の連関を支えているのが気遣い (Sorge) である. 気遣いとは, 人がつねに何かを心にかけ, それと関わりながら生きるという, 人の存在のあり方そのものを指す.

柳さんは, つげの木の剪定の場面で「気持ちよう感じたかった」と語っているように, 大工仕事は「気持ちよさ」のなかに連関していた. しかし, 「気持ちよさ」は思うようには立ち現れなかった. 柳さんはその理由を, 力の入らない「手」ではなく錆びた「はさみ」にみた. なぜ「手」ではなく「はさみ」を語ったのか. それは, 長年道具を気遣いながら続けてきた大工仕事によって, 職人としての実践の連関が強く身体に刻まれていたからではないかと考える.

柳さんは、「気持ちよさ」が感じられなかった原因を「はさみ」に帰属させていたが、すぐに「はさみのせいにしたらもうひとつあかんねんけどよ」と揺り戻している。それは、道具の状態が仕事に影響するものの、それだけを理由にしてはならないという職人としての矜持である。「あほとはさみは使いよう」ということばには、どのような道具であっても使いこなそうとする仕事への構えが見てとれる。そして錆びた「はさみ」は、「リハビリ」で研ぎ、「楽しみ」にしておくという、再び気遣いの対象となる道具として現れていく。

2. 「リハビリ」の拡張—生活と「リハビリ」が重なり合うとき

柳さんは、つげの木の剪定のあと、錆びた「はさみ」を研ぐことについて、「リハビリでしょうか?」「楽しみにしとこか」と語った。ここには、「リハビリ」と生活を分ける境界線が輪郭を失っていく様子が見てとれる。生活のなかで「包丁」や「洗濯」は、「使いにくい」し「暇いる」けど「リハビリ」としての意味が見いだされていた。一方、作業療法で行われたつげの木の剪定によって、職人としての身体が呼び起こされていった。

作業療法は、その人にとって意味のある作業を通して作業や世界との関わりを取り戻していくことを目指す（タウンゼント & ポラタイコ, 2007/2011）。柳さんの場合、「伸びひん」「曲がらへん」「しびれて」「痛い」手を動かすこととして語られていた「リハビリ」は、料理や洗濯、剪定といった生活の営みのなかへ溶け込んでいった。それは、変化した身体とともに作業や世界との関わりが生活のなかで編み直されていく過程でもあった。

しかし、その広がりの中にも「リハビリ」に含まれなかった営みがあった。それが大工仕事である。「大工」は長年の修行によって職人としての行為の水準が身体に刻まれており、その水準を満たさなければ、職人として望むかたちで実践の連関を成立させることができない。「手ゆうこときけへんから、何にもできん」という語りには、手の動きにくさとともに、現在の身体では職人として納得できる仕事を引き受けることはできないという見通しが内包されている。柳さんが包丁を「リハビリ」だと思い、大工を「リハビリ」として語らなかったのは、この違いによるものかもしれない。大工は、できるか、できないかが問われる世界であるのに対し、家事は変化した身体との折り合いをつけながら生活を営む世界として開かれている。

そして生活のなかに広がった「リハビリ」は、料理や洗濯だけでなく、孫のままごとや家族のための営みにも現れていく。そこには「何にもできん」と語っていた柳さんではなく、人とのつながりのなかで新たな働きを引き受けていく姿があった。

3. 道具を燃やすこと—仕事への区切りと職人としての構え

柳さんにとって大工道具を手入れし、使い続けることは、修行時代から続く職人としての仕事へ向かうあり方そのものであった。そのため、大工道具や木を燃やすことは単なる処分ではなかったと考えられる。「もう一回まともに仕事できたら最高なんやけどな」という語りにみられるように、道具は大工という柳さんの歴史を意味づけるものである一方で、「こんな片手で持たれへん」という現実を突きつける存在でもあった。

柳さんは、道具を燃やしたあと「すっきりした」と語る。しかし直後に「惜しい気持ちはあるで（笑）」とも語っている。道具を燃やすことは、仕事への思いと元に戻らない身体との関係を自ら整理し直した儀式のような経験であったと考えられる。しかし、道具を燃やすことで道具との関係そのものが失われたわけではない。柳さんは「置いとったらよかったの～」と思える未来を語る。「置いとったらよかった」と語ることができるのは、職人としての経験の連関がなお保持されている現れである。「研ぐん専門や」という語りには修行時代に親方から「道具を研いどけ」と任され続けた経験が響いている。仕事そのものには区切りをつけながらも、道具を研ぐという営みは、職人として身体に刻まれた経験の連関としてなお現在へ引き継がれていた。

4. 他者の声が届くとき一行為の意味と価値

つげの木の剪定場面で柳さんが語ったのは、「気持ちよう感じたかった」けれど「はさみがさんこやった」ことだった。しかし、作業療法士と学生は柳さんとは異なる側面を見ている。それはあつという間に刈り込んでいった職人としての手つきや出来映えである。そうした様子を繰り返し声にして拾うことで、柳さんが自明のこととして意識することのなかったものが照らし出され、肯定的な側面が掬い出されていく。孫のためにピアノを磨き、野菜を育てる。「すごい働きですね」という他者の語りかけに柳さんは「そやで」と応じる。そこには、他者によって価値づけられた行為をすでに自らのものとして引き受けていた姿が見てとれる。

他者のことばは、当事者に届くこともあれば届かないこともある。「先生の力がなかったら止めてへんやろうな」という語りは、「先生」の「話」を聞くなかで柳さんの感情が揺さぶられ、「話」が身体に届いたことを示している。一方、「何話してもたよりない返事」として経験された応答は、医療者との「話」を期待していた柳さんには届かなかった。脳卒中後の回復の見通しが本質的に不確実であるなかで返ってきた医療者のことばだったのかもしれない。しかし、柳さんが求めていたのは、回復の見通しを受けとるだけではなく、医療者が柳さんの身体や回復をどう捉えているのかについて「話」を聞き、ことばを交わしていくことだったのではなかろうか。

他者のことばは、当事者が声にしていない意味や価値を照らし出していく。つげの木を刈り込む手つきやその出来映え、孫のためにピアノを磨くこと、野菜を育てること。そのような行為に埋め込まれている肯定的な側面を掬い出し、ことばとして届けることも、医療者の役割である。

V. 結語

本研究は、大工として生きてきた一人の脳卒中者の、退院後の生活移行期の経験を記述した。身体に刻まれた経験の連関は、道具との関わりのなかで立ち現れ、そこで開かれる世界の違いが「仕事はできない」が「家事はできる」という一見矛盾するような状況を生み出していた。職人として培われた連関は、変化した「手」や錆びた「はさみ」によって揺らぎながらも、完全に失われることはなかった。道具を燃やす行為は、長年の道具への気遣いに区切りをつける儀式であった。しかし、「置いとったらよかったの～」という語

りには、なお仕事へと向けられた志向性が現れていた。そして、他者が行為を声にすることで、行為のなかに埋め込まれていた価値や意味が照らし出されていった。柳さんにとって調理や洗濯、畑仕事や孫との時間は、変化した身体とともに生活者としてあり続けるための営みであった。日々の営みが動き出すとき、脳卒中後の身体の変化は次第に生活の流れのなかへ織り込まれていく可能性がある。

謝辞

本研究にご協力いただいた柳さんに感謝申し上げます。また研究全般を通してご指導いただきました大阪大学人間科学研究科教授村上靖彦先生ならびに臨床実践の現象学研究会でご意見をいただきました皆様に深謝いたします。

引用文献

- Arntzen, C., Borg, T., & Hamran, T. (2015). Long-term recovery trajectory after stroke: An ongoing negotiation between body, participation and self. *Disability and Rehabilitation*, 37(18), 1626-1634.
<https://doi.org/10.3109/09638288.2014.972590>
- 道願正歩・谷村厚子 (2025). 回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者の主観的回復感の発展プロセス—複線径路等至性アプローチによる分析. *作業療法*, 44(6), 618-626. https://doi.org/10.32178/jotr.44.6_618
- Ellis-Hill, C., Payne, S., & Ward, C. (2008). Using stroke to explore the life thread model: An alternative approach to understanding rehabilitation following an acquired disability. *Disability and Rehabilitation*, 30(2), 150-159. <https://doi.org/10.1080/09638280701195462>
- ハイデガー, M. (2013). *存在と時間 I* (高田珠樹訳). 作品社. (原著 1927 年)
- 岩崎竜弥・坂本昌紀・秋山武和 (2024). 急性期脳卒中者の結髪動作と料理の再獲得を目指して生活行為向上マネジメントと修正 CI 療法を併用した作業療法の実践. *作業療法*, 43(5), 694-700. https://doi.org/10.32178/jotr.43.5_694
- 厚生労働省 (2026). 別表第一医科診療報酬点数表.
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_67729.html
- Kwakkel, G., Stinear, C., Essers, B., Munoz-Novoa, M., Branscheidt, M., Cabanas-Valdés, R., Lakičević, S., Lampropoulou, S., Luft, A. R., Marque, P., Moore, S. A., Solomon, J. M., Swinnen, E., Turolla, A., Alt Murphy, M., & Verheyden, G. (2023). Motor rehabilitation after stroke: European Stroke Organisation (ESO) consensus-based definition and guiding framework. *European Stroke Journal*, 8(4), 880-894.
<https://doi.org/10.1177/23969873231191304>
- 村上靖彦 (2013). *摘便とお花見—看護の語りの現象学*. 医学書院.

- 村上靖彦 (2025). 現象学的質的研究入門—一人ひとりに固有の経験と向き合うために.
ナカニシヤ出版.
- Salter, K. L., Hellings, C., Foley, N. C., & Teasell, R. W. (2008). The experience of living with stroke: A qualitative meta-synthesis. *Journal of Rehabilitation Medicine*, 40(8), 595-602. <https://doi.org/10.2340/16501977-0238>
- タウンゼント, E., & ポラタイコ, H. (2011). 続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正 (吉川ひろみ・吉野英子監訳). 大学教育出版. (原著 2007 年)
- 多田富雄・鶴見和子 (2003). 邂逅. 藤原書店.
- Wood, J. P., Connelly, D. M., & Maly, M. R. (2010). 'Getting back to real living': A qualitative study of the process of community reintegration after stroke. *Clinical Rehabilitation*, 24(11), 1045-1056. <https://doi.org/10.1177/0269215510375901>
- World Health Organization. (2025). *Rehabilitation*. <https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/rehabilitation>
- 結城俊也 (2011). 解釈学的現象学的分析による脳卒中者の身体経験：職人技の回復プロセスを例として. *日本保健福祉学会誌*, 17(2), 21-38. https://doi.org/10.20681/hwelfare.17.2_21

Abstract

This study aimed to describe the experience of a stroke survivor during the transition to everyday life within approximately 6 months after stroke onset. The participant was a man in his sixties who had been a carpenter. Unstructured interviews and fieldwork were conducted, and the data were analyzed using a phenomenological qualitative approach. The participant described being unable to work because his hand no longer functioned as he wished. However, he came to regard doing whatever he could manage at home, at his own pace, as a form of rehabilitation. The deep connection between his body and carpentry, which had been established through years of work, was disturbed by changes in his physical condition but was never lost. The findings suggest that with progressive re-engagement with daily activities, the physical changes following stroke may gradually become woven into the flow of everyday life.

Keywords: Stroke, Phenomenological qualitative study, Rehabilitation, Transition to everyday life

要旨

本研究の目的は、脳卒中発症後約 6 か月までの生活への移行期に焦点を当て、一人の脳卒中者の経験を記述することである。研究協力者は大工として生きてきた 60 代の男性である。非構造化インタビューとフィールドワークを実施し、得られたデータを現象学を手がかりとして分析した。研究協力者は思うように動かない「手」によって仕事ができなくなると語る一方で、家のなかでどうにかできることを、時間をかけながら行うことを「リハビリ」と意味づけた。身体に刻まれた大工仕事との連関は、変化した身体のなかで揺らぎながらも失われることはなかった。日々の営みが動き出すとき、脳卒中後の身体の変化は次第に生活の流れのなかへ織り込まれていく可能性がある。

キーワード：脳卒中，現象学的質的研究，リハビリテーション，日常生活への移行